



# HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	1948年のフィンランド・ソ連条約の成立事情に関する覚書(I)
Author(s)	百瀬, 宏; MOMOSE, Hiroshi
Citation	スラヴ研究, 24, 183-192
Issue Date	1979-07
Doc URL	<a href="https://hdl.handle.net/2115/5092">https://hdl.handle.net/2115/5092</a>
Type	departmental bulletin paper
File Information	KJ00002586874.pdf



# 1948年のフィンランド・ソ連条約 の成立事情に関する覚書（I）

百 瀬 宏

1. 問題の所在（以下次号）
2. 背景としての1947年の情勢
3. ソ連の交渉提起とフィンランドの対応
4. モスクワ交渉とYYA条約の成立
5. SKPの蜂起風聞とフィンランド内政
6. 展 望

## 1. 問題の所在

1948年4月6日にモスクワで締結された、「フィンランド共和国とソビエト社会主義共和国連邦の間の友好・協力・相互援助に関する条約」<sup>1)</sup>（フィンランド語名——*Sopimus ystävydestä, yhteistoiminnasta ja keskinäisestä avunannosta Suomen Tasavallan ja Sosialististen Neuvostotasavaltain Liiton välillä*, ロシア語名——*Договор о дружбе, сотрудничестве и взаимной помощи между Финляндской Республикой и Союзом Советских Социалистических Республик*. なお、正文は、フィンランド語とロシア語で作られている）は、ソ連が当時東欧諸国と結んだ一連の「友好・協力・相互援助条約」といじめるしく性格を異にしていることで知られている。すなわち、ソ連が当時ハンガリーやルーマニアなどのいわゆる東欧諸国と結んだ「友好・協力・相互援助条約」が、締約国の一方がドイツまたはドイツの同盟国の侵略を被った場合、他方はただちに軍事その他の援助を与える旨を規定している単純な内容であるのにたいし、ソ連とフィンランドのそれは、ドイツまたはドイツの同盟国がフィンランドを、あるいはフィンランドを經由してソ連を侵略した場合、フィンランドがその領土内において抵抗すること、また、その場合ソ連が、両締約国の合意にもとづき「必要な援助」を与える、ことを規定している、というように、その発動にさまざまな限定が附されている。これは諸条項に先立つ前文において、「大国間の利害対立の局外に立とうとするフィンランド国の念願を考慮」する旨を謳っていることとあわせて、この条約の性格を、ソ連と東欧諸国間の条約のみならず、ひろく一般の相互援助条約と比較してもまた、特異ならしめているのである。

このいわゆるYYA条約（フィンランド語による上記条約の略号であり、本稿においては、以下、この略号を用いる）は、1947年2月10日にパリで締結されたフィンランドと連合国の間の講和条約<sup>2)</sup>と並んで、戦後フィンランドの対ソ関係ないし対外関係の制度的

1) 条約のフィンランド語正文については、J. O. Söderhjelm, *Kolme matkaa Moskovaan* (Tampere, 1970), ss. 226-229, ロシア語正文については、Тойво Карвонен, *Советский Союз и Финляндия* (Москва, 1977), стр 82-84 をさしあたり参照されたい。条約の英語訳は、*Documents on International Affairs 1947-1948*, Margaret Carilyle ed. (London, 1952), pp. 315-317, 邦語訳は、横田喜三郎・高野雄一編『国際条約集』第三版（有斐閣、1974年）に見いだされる。

2) その英語全文は、さしあたり、John. H. Wuorinen (ed.), *Finland and World War II, 1939-*

枠組をなしてきたといえるであろう。これまた戦後国際関係の中で特異な様相を呈しており、その検討がまた現代国際政治構造の解明につながる面をもっている<sup>3)</sup> フィンランドの国際的地位、あるいはその中立主義を明らかにするためにも、YYA 条約の成立過程に考察を加えておくことが必要であろう。ところで、この YYA 条約がいかなる経緯で成立したかについては、筆者の管見のかぎり本格的な研究はまだ現われていない。それには、いうまでもなく、この問題が現実のフィンランドの対ソ連ないし対外関係や国内政治のうえに今なおなまなましい影を投げかけているという事の重さや、断片的な史料しか出現していないという事情が大きな原因をなしているといえるであろう。後者の点について見るならば、フィンランドおよびソ連の外交文書はアルヒーフの奥深く収められたままであるし、ソ連側政治家の個人的史料や回顧録がまったく現われていないことはもちろん、フィンランド側の当時の外交指導を強力に推進した大統領パーシキヴィ J. K. Paasikvi の個人アルヒーフですら、1984 年までは閉ざされたままの有様である。したがって、本稿執筆の段階では、諸事象の細部について史実を明らかにしたうえで、その意味で信頼のおける戦後フィンランド政治史像を構築する作業は不可能であるとしなければならない。しかしながら、もしも現代史研究の課題が、いかに断片的な史料しか存在しないにしても、それらの徹底的な吟味によっていささかでも客観的な現代史像をつくりあげることにあるとするならば、当該テーマについてもまた、検討を試みることは許されるであろう。

そこで、本序章においては、まず、問題の所在を明かにするよすがとして、YYA 条約の成立事情を論じたフィンランド・ソ連・その他の文献を検討し、そこで何が問題とされてきたかを、考えてみたい。すでに述べたように、このテーマを扱った本格的な歴史研究文献はまだ出現していないのであるが、しかし、YYA 条約の成立事情をいかに把握するかは、その後のそれぞれの時点での現実の政治的問題に直接かかわりをもってきただけにあるいは現代史の著作、あるいは政治外交論、あるいは時事問題解説などのさまざまな形の出版物が、この問題に触れてきたのである。そこで、ここでは、そうした文献のうちで代表的なものの議論をとりあげ、それぞれの文献の出版事情・意図の光に照して一応の整理を試みることにしたい。まず、フィンランド側の文献から見ていくことにしよう。フィンランドの場合、問題が現実政治——そこには戦後大統領パーシキヴィがフィンランド国民の死活の利益がかかるとした対ソ連関係が影をおとしている——と直接かかわるだけに、これに正面から大胆に取組んだ考察は現われにくかったと思われるのであるが、それにもかかわらず、1955 年には、政治史の研究者ヒュヴァマキ Lauri Hyvämäki が、戦後フィンランド史を扱った著書『危険な時代』<sup>4)</sup>の中で、この問題を扱っている。この書物は扱っている諸事件に直接の評価を下すことはなく、むしろ淡々と戦後政治の推移を述べているのであるが、その行間にソ連の管理下におかれていた敗戦国フィンランドにたいする著者の危機感が立ちこめている<sup>5)</sup>。このヒュヴァマキの著作は、立場からいえば保守派に

1944 (New York, 1948), Appendix B を参照。

3) その用法の適否は別として、1960 年代末から西側世界で用いられた「フィンランド化」(“Finlandization”) という用語ひとつをとってみても、このことを物語っているといえよう。

4) Lauri Hyvämäki, *Vaaran vuodet 1944-48* (Helsinki, 1955).

5) 序文の中でヒュヴァマキは、次のように述べている。「読者は、この書物の中で、著者以外の者が用いた言を引用した場合以外には、祖国という言葉に出会うことはほとんどないであろう。だがし

属するといえるであろうが、YYA 条約の成立事情は、戦後フィンランドの一つの時代の終りを物語る事件として、書物の終章で取扱われている。すなわち、ヒュヴァマキは、1948年2月23日に、ソ連がすでに東欧のハンガリーおよびルーマニアと結んだと同様な「友好・協力・相互援助条約」をフィンランドと締結したいと提案したスターリンの書簡<sup>6)</sup>がフィンランド大統領パーシキヴィ J. K. Paasikivi に送られたことに始まり、書簡の公開によって当時のチェコスロヴァキア政変を念頭においたフィンランド国内世論が騒然となったこと、3月下旬にフィンランド側代表団がモスクワに派遣され、交渉のまとまった条約が「国民大多数の中立願望に反して、世界戦争後に生じた勢力グループ化の中にわれわれを位置づけてしまったことが明らかになった」が、「条約がルーマニアおよびハンガリーと〔ソ連が〕結んだ模範条約そのままの青写真でなかったことはせめてもの慰めであった」<sup>7)</sup>こと、を述べている。さらに、ヒュヴァマキは、この条約問題と平行してフィンランド国内で同国共産党によるクーデタ企図の風聞が立ち、これに関連してパーシキヴィが軍を動員した厳戒措置をとったこと、またこの事件を機に同年7月の総選挙で共産党が敗北して下野し、かくて、1948年前半を以て、フィンランドの内外政が大きな転換をとげるにいたったことを述べて、書物そのものの筆を擱いている。

ヒュヴァマキの上記著書は、その取扱対象となっている事件と時間的にもへだたることわずかであり、出現史料も事件当時とほとんど変りない頃にかかれたものであるが、1968年になると、フィンランドの国連大使ヤコブソン Max Jakobson による『灼熱の路線に——フィンランド対外政策の核心的諸問題』<sup>8)</sup>が出版され、YYA 条約の成立事情に新しい光を投げかけた。ヤコブソンは本来ジャーナリストとしての経歴をもち、1956年に「冬戦争」をテーマとした著作によって名声を馳せたことからフィンランドの外交界に登用された人物であるが、この書物の中では第二次大戦後のフィンランドの対外政策、とくに対ソ政策を、周到に説明している。純個人の研究者であるヒュヴァマキの書物とヤコブソンの著書を厳密な意味で比較することは困難であるかも知れないが、両書の間にはそれなりの歳月の流を感じさせる相違が見いだされる。それは、一つには史料の面であって、ヤコブソンは、60年代になって刊行された回顧録類や、恐らくは外交当事者としての資格で披見しえたと思われる未公開史料にもとづいて、ヒュヴァマキが及びえなかった空白を埋めている。いま一つ、より重要と思われることは、明らかに1950年代後半以降のフィンランドの外交軌跡を踏まえて、YYA 条約およびその成立過程にたいして、新たな角度からの議論を提起しえているといつてよいであろう。この書物の中でヤコブソンは、この問題にとくに一章をさいているが、ヒュヴァマキとは対照的に YYA 条約の成立にたいし積極的な評価を与えている点が注目される。いかえれば、前記二月のスターリン書簡が望んだ

かし、愛の感情を身に備えている個人としての私は、対象の研究を深める程に、この『悩める美わしき』国のイメージが、いや増しに沸き上ってきたと語りたいた気持を禁じえない。 *Ibidem*, s. 6.

6) ただし、書簡の日付は2月22日。

7) *Ibidem*, s. 109.

8) Max Jakobson, *Kuumalla linjalta. Suomen ulkopolitiikan ydinkysymyksiä 1944-1968* (Helsinki, 1968). この書物は、同時に各国語で出版された。その英語版は、Max Jakobson, *Finnish Neutrality. A Study of Finnish Foreign Policy since the Second World War* (London, 1968). 邦訳は、原書出版後の歴史の経過を考慮に入れて若干の改訂を施したうえで出版された。M. ヤコブソン (上川洋吉訳) 『フィンランドの外交政策』(日本国際問題研究所, 1974)。

東欧諸国なみの条約ではなく、すでに見たようなさまざまな限定を設けた条約として成立させたパーシキヴィの外交手腕に高い評価を与えているのである。そして、現存するような YYA 条約の成立を、クーデタ風聞によるフィンランド共産党（以下、SKP の略号を用いる）の衰退と並べて、「1948年4月の諸事件は、パーシキヴィ大統領にとって二重の勝利であった」<sup>9)</sup>と断ずるのである。したがって、YYA 条約の成立経緯に関しては、ヤコブソンの議論は、当然のことながら、なにゆえにソ連側が、スターリン書簡段階の要求から、モスクワでの交渉時に東欧諸国なみの条約構想を簡単に撤回し、パーシキヴィが訓令したフィンランド側の条約案をほとんどそのまま受容れる態度に変化したか、という点に集中する。そして、ヤコブソンは、その期間に、西側陣営の対ソ態度がチェコスロバキア政変によって硬化したこと、北欧諸国の態度変化、スターリンとチトーの紛争発生によって「ソ連指導者は対フィンランド関係においてこれ以上面倒を起したいと欲するはずもなかったのである」<sup>10)</sup>と推測している。YYA 条約の成立経緯そのものについては、目下のところヤコブソンを越えた分析は見当たらないが、YYA 条約を現在見るような形でかちとったことに関しては、パーシキヴィを継承したケッコネン U. K. Kekkonen の外交路線にたいする執拗な批判者として知られる保守派論客ユンニラ Tuure Junnila を含めて<sup>11)</sup>、フィンランドの論壇の大方が評価しているところであるといえよう<sup>12)</sup>。

それでは、以上のようなフィンランド側の諸文献の動向にたいして、ソ連側の諸文献の記述には、どのような特徴が窺えるであろうか。一般に、フィンランドないし北欧の問題を扱ったソ連側の文献は、いずれも YYA 条約に言及し、ほぼ大同小異の表現でこれに高い評価を与えているのであるが、条約の成立過程そのものに説きおよんでいる文献はごくわずかであり、それも1960年代末以後に現われてきているにすぎない。比較的早い時期から時折出されていたフィンランドに関する概観的小冊子には、YYA 条約が、「『パーシキヴィ路線』形成上の決定的な段階であった<sup>13)</sup>」、あるいは「両国間の平和と友好の一層の発展のための堅固な基礎をすえた」<sup>14)</sup>、といった評価がなされ、それが「フィンランドの主権をいささかも制限しないばかりか、逆に同国の国家的独立を強化した」<sup>15)</sup>、といった説明が加えられることはあっても、条約の特別な性格やその成立事情に立入ることはなされていない。筆者の管見のかぎりでは、1969年にフィンランドで出版されたポフリョプキン V. V. Pohlebkin によるソ連・フィンランド関係史の概説書<sup>16)</sup>が、ともかくもその問題を論じた最初のソ連側文献であるように思われる。

同書もまた、「1948年春の出来事は、もちろん、フィンランド政府の善意と平和希求の努力にたいするソ連の信頼を強めた」<sup>17)</sup>として YYA 条約の成立に大きな意義を見いだし

9) Jakobson, *Finnish Neutrality*, p. 44. 邦訳書, 88 ページ。

10) Jakobson, *Finnish Neutrality*, p. 44. 邦訳書, 88 ページ。

11) Tuure Junnila, *Suomen taistelu turvallisuudesta ja puolueettomuudesta. Katsaus Suomen ulkopolitikkaan maan itsenäisyyden aikana* (Porvoo, 1964), s. 99.

12) 歴史研究者による YYA 条約成立事情の検討としては、Osmo Apunen, *Paasikiven-Kekkonen linja* (Helsinki, 1977), ss. 49-61 があるが、ヤコブソンの仕事の域を出てはいない。

13) Д. И. Попов, Финляндия. Политико-Экономический очерк (Москва, 1957), стр. 188.

14) И. Роздорозный и В. Федоров, Финляндия-наш северный сосед (Москва, 1966), стр. 37.

15) Попов, Указ. соч., стр. 188.

16) V. V. Pohlebkin, *Suomi vihollisena ja ystävänä 1714-1967* (Porvoo, 1969).

17) *Ibidem*, стр. 337.

ているが、注目すべきは、同条約の成立をその背景から説きおこしていることであろう。同書は、なにゆえにソ連が YYA 条約を必要としたかについて、次のように述べている。「〔1947年の講和条約によって〕休戦から平和へと移行したことによって、フィンランドの国際的地位は変り、同国にたいする一連の制約は取除かれた。とりわけ、連合国による管理は取消され、管理委員会はその活動を終えてフィンランドを去った。諸変化は、あらたに、フィンランドの対外政策の将来の方針、新しい状況におけるフィンランドの対ソ態度の問題を前面におしだした。これは、1947年春以降国際情勢が大きな変化をとげていただけに、一層理由のあることであった」<sup>18)</sup>。この文の趣旨は明快である。連合国との講和条約によって連合国（実質的にはソ連）の管理から解放されたフィンランドが対ソ友好の道を踏みはずさないようにする必要があったこと、およびこの必要の度合が折から始まった東西冷戦状況のもとで一層高まったこと、この二つが YYA 条約を要求した、というわけである。そのあと同書は、フィンランド側もまた、パーシキヴィ大統領の言明にみられるように、対ソ侵略の具とはならない決意を有していた、と伏線を敷いたうえで、1948年2月のスターリンの提案に始まる YYA 条約の締結事情について、ほぼ3ページにわたり略述している。その中でわれわれの関心をひくのは、次の一文である。「フィンランド政府が提出した草案が条約の土台とされたが、これがただちに会談に友好的な精神をもたらした。それは、フィンランド側が当初抱いていた警戒的な態度を、ときほぐした。ソ連側は、その際、まことに明けすけな態度でかつ明確に、フィンランド人の考えと一致し、かつ決定的な効力をもたせうるような条約を作りたいのだ、という願望を強調した。フィンランド人政治家の方でもまた、ソ連の態度にたいし相応の評価を与えた。そうした結果、両国の死活の利益を反映した条約が生れたのである」<sup>19)</sup>。ここで読者が気づかされることは、ソ連側が通常型の相互援助条約を要望したのにたいしフィンランド側が限定された特殊な条約を望んでこれを実現させた、というフィンランド側の多くの文献が指摘する点がこの叙述ではぼやけているのではないか、ということである。これに先立つ2月のスターリン書簡に触れている部分で、たんに「相互援助条約」という表現が用いられていることは、一層こうした印象を深めるものである。ところで、ポフリョプキンの著書は、その後内容の一部を書きあらためたうえで、ロシア語原文のまま、1975年にソ連で出版された<sup>20)</sup>のであるが、YYA 条約を論じた部分を見ると、フィンランド側の動向についてより詳しい叙述がなされているほかは、大同小異の論旨である。ただし、スターリンの提案についての言及は一層簡単になっているし、会談の叙述に入ったところでは、「3月25日に始まったソ連・フィンランド交渉の過程で、フィンランド側がまず自身の条約草案を提示するように奨められた」<sup>21)</sup>という、上記のわれわれの印象を一層強めるような表現が用いられているのである。

その後のソ連側の文献としては、1974年に出版された第二次大戦後のスカンジナビア間

18) *Ibidem*, s. 332.

19) *Ibidem*, s. 335.

20) В. В. Похлебкин, СССР-Финляндия (Москва, 1975).

21) Там же, стр. 321.

題を論じた書物も、YYA 条約の成立過程に漠然と触れているが<sup>22)</sup>、何よりも重要なものは、1976 年に出されたバルテューフ Т. Бартењев およびコミッサーロフ Ю. Комиссаров によるソ連・フィンランド関係の研究書<sup>23)</sup>であろう。同書は、YYA 条約の成立過程に関してとくに一章をさき、従来のソ連側出版物には見られないほど多くのページをこれにあてているのであるが、そこから、ポフリョプキンの書物の叙述に関してわれわれが抱いた印象がかりそめのものでなかったことが判明する。同書は、ソ連側が YYA 条約を必要とした理由として「アメリカおよびその他の西側帝国主義列強の侵略的勢力の活発化」を挙げ、またフィンランド側においてもこうした条約の必要性が以前から認められていたことを、ポフリョプキンよりも多くの事例を挙げて述べており<sup>24)</sup>、その点も検討に価するのであるが、さらに注目すべきは、具体的な交渉過程を論じた部分で、2月22日付のスターリン書簡の一部を引用するにあたり原文の「……ソビエト政府は、ハンガリー・ソ連およびルーマニア・ソ連協定と同様な 友好・協力・相互援助に関するソ連・フィンランド協定を締結することを提案する」というくだりの、筆者が□□□□枠で囲んだ部分を省略の明示もなしに落していることである<sup>25)</sup>。これは、当初ソ連側が東欧通常型の条約締結を望んでいたという認識を読者に与えまいとする試みかと受けとれるが、ついでモスクワで会談が開始された段階を記述したところでは、次のように述べられている。「初回の会合において、ソビエト代表団は、ハンガリーおよびルーマニアとの友好・協力・相互援助に関する最近締結された条約か、あるいは、もしフィンランド側により適切であるならば、1943年に結ばれたチェコスロバキアとの協定を交渉の基礎とすることを提案した。しかし、フィンランド側の立場（ソビエト側には、ハンガリーおよびルーマニアとの条約の軍事条項の表現型式にたいするかれらの見解は知られていた）を顧慮して、ソビエト代表団は自己の提案には固執せず、フィンランド代表団が自分自身の草案を提出するようという希望を述べた<sup>26)</sup>。つまり、ソ連側は、一応は東欧通常型の条約を一応は提案したが、それは、もともとフィンランド側が賛同しないことを知っており、かつその点で譲歩する心構えをもったうえでのことであった、といたいのであろう。しかも、同書は、こうしたソ連側の心構えを、2月のスターリン書簡の段階にまでさかのぼらせることに力を注いでさえいる。すなわち、同書は、フィンランドや西側で、スターリン書簡からモスクワ会談にいたる期間にソ連の態度が変化した、という言葉が行なわれているがこれは誤りであるとして、次のようにしるしている。「ソビエト政府よりフィンランド大統領にあてた1948年2月22日付書簡中の、ハンガリーおよびルーマニアとの条約に関する言及は、決して、これらの条約の寸分たがわぬひき写しであるような条約をフィンランドと結ぼうと、ソ連側が考えていたことを、意味しない。何より、ソ連がハンガリーやルーマニアや

22) 「友好・協力・相互援助に関するソ連・フィンランド条約の締結のための交渉は、ソ連のイニシアチブで行なわれた。ユー・パーシキヴィ大統領および……フィンランド側の代表団の希望を顧慮して、ソビエト政府は、フィンランド側が提出した草案を条約の基礎とすることに同意した。」Ю. И. Голошубов, Скандинавия и проблемы послевоенной Европы (Москва, 1974), счр. 73.

23) Т. Бартењев и Ю. Комиссаров, Тридцать лет добрососедства. К истории советско-Финляндских отношений (Москва, 1976).

24) Там же, стр. 72-76.

25) Там же, стр. 77.

26) Там же, стр. 87.

その他の西側隣国と結んだ条約に含まれているところの、ドイツの侵略の再現を許さない、また、ありうべき侵略にたいして共同の措置をとるという基本的な考え方が、問題にされていたのである<sup>27)</sup>。

さて、上述の検討から明らかになったことは、フィンランド側の諸文献が、スターリンによる交渉提議と YYA 条約締結の間のソ連側の態度の変化を重視するのにたいして、ソ連側の諸文献がこの変化を否定し、スターリン書簡が与える東欧なみ条約の構想をソ連が抱いていたという印象をうち消そうと努めていることである。ここから、フィンランド側の外交的主体性に力点をおく前者と、ソ連側のフィンランドにたいする終始一貫した理解を印象づけようとする後者の、それぞれの意図が窺われるのであるが、それでは、YYA 条約の両当事国以外の研究者は、YYA 条約の成立事情についていかなる評価をなしてきたであろうか。この場合もまた、この問題にゆきずりのかたちで言及している文献は多いのであるが、多少とも正面から論じた研究としては、ヴロヤンテス John P. Vloyantes の著作『絹手袋のヘゲモニー』<sup>28)</sup>の該当部分を挙げるができる程度であろう。この甚だ比喩的な表題で著者が意図しているのは、かれのいうところの「軟勢力圏」(soft sphere of influence) の事例研究である。ヴロヤンテスによると、強国が自国の周辺に張りめぐらす勢力圏には、イデオロギーにいたるまで小国を自国と一体化しようとする「硬勢力圏」(hard sphere of influence) と、小国独自の政治経済システムの存続を許しておく「軟勢力圏」とに分けられるが、上記の著作は、フィンランドを後者の事例研究の対象としたものである。ヴロヤンテスもまた、YYA 条約の成立に一つの章をあてているが、かれによると、冷戦状況の進行下にソ連は、それまで「軟勢力圏」として確保していた東欧諸国を「硬勢力圏」に変えようとしたのであるが、その際フィンランドについては、「軟勢力圏」のまま、ただしこれを条約のかたちで確定しておくことを欲した。1948年2月のスターリン書簡もこうした意図にもとづくものに他ならなかったが、ソ連側は、フィンランド側の抵抗に直面すると、対ソ友好論者として信頼のおけるパーシキヴィの政権存続を望むがゆえに、譲歩して現 YYA 条約の成立となった、というのである。

ヴロヤンテスの「軟勢力圏」論そのものの評価は本稿の課題の外にあるが、YYA 条約の成立事情に関するかぎり、かれの議論は、すでに見てきたフィンランド側文献とソ連側文献の主張のへだたりに、はからずも架橋したような爽快さを感じさせる一面があるが、歴史研究的な観点からすれば——もとよりヴロヤンテスの関心はそこにはないが——立証を欠いており、そのことをさらにつきつめれば、著者の一般理論的枠組が、第二次大戦後の時期のソ連対外政策の具体的な検討や、そうした政策とフィンランドの内政、とくにその中の SKP の動向との関連の考察などの作業をことごとく落していることに、われわれなりの不満をもたざるをえない。とりわけ、YYA 条約締結とその前後の SKP 蜂起風聞事件との関係はきわめて重要であって、たとえそこに具体的な因果関係がなかったにしても、両者を歴史叙述のうえでどのように文脈上関連させてとらえるか、という問題は、避けて通ることができないと思われるからである。たとえば、すでに見たように、ヤコブ

27) *Ibidem*, стр. 93.

28) John P. Vloyantes, *Silk Glove Hegemony. Finnish Soviet Relations 1944-1974* (Kent, Ohio, 1975).

ソンは、そこに注目しており、「逆説的であるが、〔パーシキヴィ〕の国内における反共産主義の立場は、ソ連とのかれの友好政策にたいする支持をえさしめたのである」<sup>29)</sup>と述べているし、イタリアの政治史研究者パストレッリ Pietro Pastorelli は、パーシキヴィが、YYA 条約のかたちでソ連の安全保障要求を満足させた結果、フィンランド共産党にたいするフリー・ハンドをスターリンから与えられた、という大胆な仮説をたてているのである<sup>30)</sup>。

以上の諸論説の検討によって明らかとなった諸問題点を踏まえつつ、以下の行論において YYA 条約の成立事情につき一考察を試みることにするが、それに先立ち、一次史料的文献に主要なものについて、簡単に紹介しておくことにしたい。これも冒頭で述べたように、本稿執筆の段階においても、一次史料的文献はきわめて乏しいのであるが、対象とする事件ののちに出現した重要なものとして、四つを挙げることができるであろう。そのうち二つは、フィンランド側の回顧録であって、まず、当時のフィンランド首相ペッカラ Mauno Pekkala の秘書官をしていたヘイッキラ Toivo Heikkilä が書いた『パーシキヴィの統治。首相秘書官の回顧録 1944-1948 年』がある<sup>31)</sup>。これは敗戦後のフィンランド政府の政策決定過程に貴重な光をあてており、本稿の対象についても利用することができる。つぎに、ソエデルヘルム J. O. Söderhjelm の『モスクワへの三度の旅』<sup>32)</sup>は、フィンランド側代表団の一人としてモスクワでの会談に参加した人物の回顧録であり、会談の経過についてくわしい。のこる二つは、アメリカ側の史料であるが、その一つは、アメリカの国務省刊行の外交文書集であって、1948 年度分の第 5 巻中にとくに「フィンランド。フィンランドの国家的独立の維持にたいするアメリカの関心」なる章を設けており、その中にフィンランド側の諸事情についても、多くの興味深い傍証的な記録が含まれている。いま一つのアメりカ側史料は、事件当時駐フィンランド米大使館員であったユリタロ J. Raymond Ylitalo による回顧録<sup>34)</sup>である。ユリタロは、フィンランド系アメリカ人で現地の言葉に堪能であり、重要な情報につうじていたことは明らかであるが、同書の執筆に当っては、アメリカ側の未公刊外交文書にも立脚したといわれる。以上のほかにも、断片的ではあるが貴重な史料がさまざまな文献中に見いだされるが、それらの解説については、行論中にゆずる。いずれにせよ、史料の出現状況そのものは、なお過渡的な段階にあるというべきであり、本稿は、もとより、後日の改定を期すべき未定稿的覚書にすぎない。

29) Jakobson, *Finnish Neutrality*, p. 44; 邦訳 88 ページ。

30) これは、1978 年 10 月 24-27 日にイタリアで開かれた、イタリアとフィンランドの両国研究者間のシンポジウムでローマ大学教授であるパストレッリが述べたものであるが、筆者には、十分な論証を欠いているように思われる。*Uusi Suomi*, 31. 10. 1978.

31) Toivo Heikkilä, *Paasikivi Peräsimmä, Pääministerin sihteerin muistelmät 1944-1948* (Helsinki, 1965).

32) Söderhjelm, *mt.*

33) *Foreign Relations of the United States 1948, Vol. IW: Eastern Europe; The Soviet Union* (Washington, 1974).

34) J. Raymond Ylitalo, *Salasanomia Helsingistä Washingtoniin* (Helsinki, 1978).

## BACKGROUND OF THE FINNO-SOVIET TREATY OF 1948 (I)

Hiroshi MOMOSE

The Finno-Soviet Treaty of Friendship, Co-operation and Mutual Assistance, which was concluded on April 6, 1948, shaped a framework for post-War Finno-Soviet relations. To understand the present Finnish neutralism and the particular international position of Finland in the contemporary world, one needs to look back on the course of events preceding the conclusion of the treaty. The present writer admits that only a few source materials are available for research at this stage, and that the events of 1948 still cast shadows on contemporary politics. For all this, however, the subject is worth the effort of study, so far as the student of contemporary history has to make even fragmentary evidences tell something more than superficially expected. The present writer is going to discuss background to the treaty of 1948 by publishing his article in a few parts. The present part (I) is intended for an introductory work, in which the writer discusses the Finnish, Soviet and other literature relating to the subject.

An early important work coming out from Finland is Lauri Hyvämäki's *Vaaran Vuodet 1944-48* (The Years of Danger), published in 1955<sup>1)</sup>. It is an account of the political development of post-War Finland, with the last chapter dealing with the events of 1948. Hyvämäki is of the opinion, that the treaty of 1948 involved Finland in the process of division of the post-War world, though the majority of the Finns hoped for a neutral position. It was only consolable that the treaty was not a mere blue print of the Soviet model treaties concluded with East European countries. Thirteen years later, Max Jakobson wrote a short, but informative book on the Finnish neutrality, in which he takes more affirmative view of the treaty<sup>2)</sup>. By calling readers' attention to the differences between Stalin's original idea put forth in his letter of February 22, 1948 and the content of the concluded treaty, Jakobson even states that Finland won a victory. Faced by President Paasikivi's statesmanship, the response of the West to Czechoslovakian affairs in February, changing attitudes of other Scandinavian states and the Yugoslavian revolt within the Soviet orbit, the Soviet Union sought for an alternative by demanding a counterproposal from Finland.

In contrast to the Finnish literature attaching importance to the change of the Soviet attitude, Soviet publications have hitherto given an impression that the Soviet Union had followed a consistent line of policy of meeting Finland halfway. A Soviet account of the origins of the treaty of 1948 was presented in V. V. Pohlebkin's chronological sketch of Finland's relations with Tsarist Russia and the Soviet Union. The book was published in Finland in 1969<sup>3)</sup>, but its expanded, Russian version appeared

1) Lauri Hyvämäki, *Vaaran vuodet 1944-48* (Helsinki, 1955).

2) Max Jakobson, *Finnish Neutrality. A Study of Finnish Foreign Policy since the Second World War* (London, 1968).

3) V. V. Pohlebkin, *Suomi vihollisena ja ystäväenä 1714-1967* (Porvoo, 1969).

in 1975<sup>4)</sup>. In the latter edition, Pohlebkin mentions that in the negotiations beginning on March 25 the Finnish delegation was first urged to present their own draft of the treaty. In 1976, a new book on contemporary Finno-Soviet relations was published by T. Bartenyev and Y. Komissarov<sup>5)</sup>. Readers may wonder at a quotation from Stalin's letter of February 22, which lacks a phrase of the original text: "similar to the Hungary-Soviet and Rumania-Soviet pacts"<sup>6)</sup>.

Among works from other countries, J. P. Vloyantes' book tries to interpret the Soviet intention in 1948, by using his sphere of influence theory<sup>7)</sup>. According to Vloyntes, the Soviet Union aimed at reorganizing Eastern Europe at the beginning of the year into a "hard sphere of influence". As for Finland, however, Stalin sent the said letter only to keep Finland within his "soft shere of influence". When Finland showed flexibility in response, Stalin drew back even from his original proposal. While this hypothesis apparently bridges over the difference between the Finnish and the Soviet literature, a general theoretical approach often tends to skip over explanations which could have been expected of ordinary historical writings.

---

4) В. В. Похлебкин, *СССР-Финляндия* (Москва, 1975).

5) Т. Бартедьев и Ю. Комиссаров, *Тридцать лет добрососедства. Кистории советско-финляндских отношений* (Москва, 1976).

6) *Ibid.*, p. 77.

7) John P. Vloyantes *Silk Glove Hegemony, Finnish Soviet Relations 1944-1974* (Kent, Ohio, 1975).